



中高生とともに差別と闘う

『「ない」ことにされると』

吉成タダシ (うずしおランチ代表)



道半ば

前号まで、最後の中学生生集会上について長々と述べてしまいました。が、その後も衝撃的な学びの場面はいくつもありました。そのうちの二つを紹介させていただきます。

昨年夏に開催された鳴門市人権地域フォーラムです。教え子であるシンジがパネリストとしてステージにあるなか、フロアにいたヒロミが手を挙げ発言しました。シンジとヒロミは世代こそ違えど、共に学習会で学んだ仲間同士です。

はじめこそ簡単な自己紹介から小学時代・中学時代の思い出、部落差別を感じたときのこと、そしてパートナーとの出会いや自分のルーツを伝えたときのことについて語ってくれました。

＊

——彼が私のことを家族に話したとき、お義父さんが大反対だったんです。ものすごい嫌悪感というか、絶対に認めない、会いもしないってなったとき、私もどうアプローチしていいかわからなくて。彼もすごく悩んだと思うんです。お義父さんから縁を切ると言われたとき、ずっと考えて考えて考えて、考え過ぎて過呼吸になって倒れたりもしてしまっていました。それでも私と一緒に生きていくっていう道を選んでくれて——

＊

——主人とは人権の話もしないし、人権問題とかに興味がないというか。でもこの前、お酒も入っているという話しているうちに、やっぱりあるんだと思うんです。実の父に対しての思いが。縁切らうという教育をしながら……泣きながらっていうか、主人は主人で苦しんでいるんだと思っただけで、主人の気持ちもいつか、簡単じゃないけど、楽にできたらなっと思えます。

＊

苦しんだのは、彼女だけではありません。彼もまた同様に苦しんでいたのです。いや、もしかすると、彼女には共感し支えてくれる仲間がいることを思えば、彼の方がよりしんどかったかもしれませぬ。

私からすれば、「彼が通っていた学校はいったい何をしていたんだ！」という怒りの気持ちでいっぱいなんです。どの子にも、どの学校でも、他人事ではない人権学習をしなければ、結果として子どもたちに苦しい思いを背負わせてしまうというのを、学校は自分事として、真剣に捉えなくてはなりません。学校とは、勉強ができればいいというわけではないのです。全人的な成長を促すのが学校なの

です。中学生の娘に、会ったことのないおじいちゃんのことをどう伝えるか、ヒロミは悩んでいました。それはパートナーのことについてもでした。

＊

——秋の人権こども塾の場面。高一のKは訥々と、言葉を探しながら、絞り出すように語りました。

「ない」「ない」と

＊

今まで学校の先生に、「みんな部落差別って知っていますか」といって聞かれても、シーンとなっていて。それで、「今はそんな差別とか全然見ないし、知らないよね」と言われて、「そっか、それならいいね」と思っていた。でも、部落差別って、意識してなかったんです。

＊

ある日、お父さんに、「実はボクのお父さんは部落出身なんだ」と言われて。それで私と妹は、「そうなんだ。でも別に……」みたいな感じだったんです。そこからいろいろ話を聞いて。

私が行ってない時期があったら、お父さんにかけてきて、その理由をお父さんにかけてきて、何回も電話をお父さんにかけてきて、お父さんが後から知ったんです。私が学校に行かないのは、じいちゃんや部落出身だからじゃないのかわかって、めっちゃ泣きながら電話がかかってきて、まさかそんなに部落のことまで悩ませてたのかと。そんなに意識してなかったけど、もうちょっと知っていききたい

なと思ったし、おじいちゃんにもこの場に来てもらいたいなと思いました。

＊

決して積極的なタイプではないK。そんな彼女が、おじいちゃんに対してこんなふうに通っていたなんて、思いもしませんでした。いわれない酷い差別を受ける人とはどうなるか。心的外傷ストレスとして、後々まで潜在化し、自身を責め続けることになってしまふことを、おじいちゃんは伝えていたのだと思います。また、「いじめとか全然見ないし、ないよね」と言われると、「ある」とは言いにくいし、言えなくなってしまうので、思っていることは言えないです。本音を語り合うことはできるでしょうか。

＊

似たような話が、ニュースでも見ます。教員の不用意な発言が子どもを傷つけたとか、それがもとで事件になったとか。それだけ教員の想像力が失われてきたのかもしれませぬし、それを補うだけの研修がなされていないのかも知れません。

＊

いずれにしてもKには、共感性や自己開示のしようのない、深まったり豊かな人権学習にしかなくなってしまったということですね。こんな学習にしかなくていい現状で、どうして当事者が声をあげられるでしょう。学校教育の在り方そのものが問われているのだと思います。

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾ニュース

板中生とT中生の交流全体学習② ～平行線で手をつなぐ語り合いの部落問題学習～

板野中学校3年A組・T中学校交流全体学習(公開授業)

主 題 「人間としての生き方を求めて」 日 時 1999年5月29日(土) 第2校時
資 料 『自分以下を求める心』 会 場 T中学校体育館
(ハツ塚 実・学級記録より) 授業者 森口 健司

T(森口)の語り「人を差別したり、いじめたりする世界から解放されていくとは、どういうことなのか」

T中学校の仲間や保護者の皆さん、共に差別をなくしていこうとする多くの仲間にも力強いを感じています。今日はまず、板野中学校3年A組の授業を公開して、その授業を受けてこの体育館に集まった仲間と差別解消への思いを語り合えたらと思っています。そのきっかけとして、『自分以下を求める心』を資料として用意しました。この資料を通して、共に自分自身の生き方を見つめ、人を差別したり、いじめたりする世界から解放されていくとは、どういうことなのかをみんなで考え、語り合い深めていくことができたと思います。いっばいの視線を感じながら、思いっきり自分自身を表現していきましょう。資料に寄せる思いを語ってみてください。

M・Nの語り「自分が好きになって、心に余裕が持ててきた」

私は『自分以下を求める心』という資料にあるように、自分に自信がないと自分以下の人をさがしてしまいます。でも自分に自信があったらそんなことをしなくなります。1年や2年の時は、自分に自信がなかったから、自分より下の人を思って、その人と授業中に遊んだりして、そんな自分が好きでなかったけど、3年になって勉強とかいろいろ頑張れるようになって、自分が好きになって、心に余裕が持ててきたから、人の悪口も言うことも少なくなったし、自分が好きになったら、自分以下を求める心というのはなくなっていきます。



T(森口)の語り「みんなで考えた自分が好きになる3つの原則とは」

自分が好きになるという3つの原則が、1学期スタートの参観授業で提起されました。そのことを今日の授業の最初に確認しておきたいと思います。3つの原則の1つ目は「嘘をつかない」ということ、2つ目は「人の悪口を言わない」ということ、3つ目は「今日できることは今日精一杯やる」ということ、このみんなと確かめ合った3つの原則がいつも心の中で作用して、よりよく生きていこうとする自分がある。そんな自分が好きって実感する。今日もみんなそんな思いを共有する楽しい時間にしたいと思います。



A・Mの語り「人のことをとやかく言わないで、自分自身と闘っていく」

私もそうだけど、きつとみんなも自分以下がほしいと思ったことがあると思います。そんな弱い心がなぜか出てしまいます。人のことをとやかく言わないで、自分自身と闘っていけたら、自分以下を求めない心や弱い心は出てこないと思うし、人の悪口を言わないで楽しく生きていけたら、自分が輝いていけて、自分以下なんてほしいと思わないで自分を好きになっていけると思います。

C・Tの語り「自分が精一杯力を出している時ってというのは、下の人を求めない」

自分が精一杯力を出している時ってというのは、下の人を求めないで、もっと自分を伸ばそうと思うんやけど、自分で満足できない生活をしている時は、何か自分の中でイライラしてくるから、自分より下って思う人をさがして、そのイライラを押さえるようにして、教室で「昨日勉強しなかった」という子がいたら、変やけどその子から元気もらう時があって、そういう時の自分はやっぱり嫌やし、そういう気持ちをなくしていくには、自分が精一杯の生活をしていかなあかんと思います。

T(森口)の語り「差別の落とし穴について自分の生活を通して考えていきたい」

世の中がすごく安定しているときは、差別は起こりにくい。でも世の中が不景気になって生活が苦しくなったら、いろんなところで部落差別が吹き出してくる。みんな自身が生き生きして安定したら、友だちのよるこびが自分のよるこびに思える。でも自分の中に卑屈なものがたまっていたら、すぐにねたんでしまったり、ドロドロした意識が顔を出し卑屈になっていく。そういう差別の落とし穴について自分の生活を通して考えていきたい。差別って何だろう。差別やいじめを当たり前のようにしてしまう、そういう意識って何だろう。



S・Aの語り「弱い自分をつくらないように、自分以上をつくっていける自分になりたい」

テストが返ってきたとき、人の点数を見て、ホッとしたり、うらやましく思ったりします。そんなことを思いたくないと思っても、思ってしまう自分が嫌です。たぶん、自分の中に弱い自分があるんだと思います。今は弱い自分に負けています。弱い自分をつくらないように、自分以上をつくっていける自分になりたいです。

本気の人権学習は、——「すべてを変える」 うずしおランチ共同代表 森口 健司